

「デュプリシティ スパイは、スパイに嘘をつく」 ★★★

2009（平成21）年4月8日鑑賞<東宝東和試写室>

監督・脚本：トニー・ギルロイ

レイ・コヴァル（エクイクロム社のスパイ、元MI6）／クライヴ・オーウェン
クレア・ステンウィック（パケット&ランドル社のスパイ、元CIA）／ジュリア・ロバーツ

ハワード・タリー（パケット&ランドル社CEO）／トム・ウィルキンソン

ディック・ガーシック（エクイクロム社CEO）／ポール・ジアマッティ

2009年・アメリカ映画・125分

配給／東宝東和

<デュプリシティとは？>

あなたの英語力でデュプリシティ（DUPLICITY）ってわかる？これは、（言動に）表裏のあること、二心、二枚舌、不誠実、二重性という意味がある。本作は、元イギリスMI6の諜報員からエクイクロム社の産業スパイに転身した主人公レイ・コヴァル（クライヴ・オーウェン）と、元CIA諜報員からパケット&ランドル社の産業スパイに転身したもう1人の主人公クレア・ステンウィック（ジュリア・ロバーツ）がくり広げる、お仕事上での騙し合いと恋愛上での騙し合い。騙しのプロがくり広げるキツネとたぬきの化かし合いは見応え十分だが、私たちにはその騙しのテクニックが高度すぎるのが難点？

『デュプリシティ』だけでは日本人にはわからないため、邦題では『スパイは、スパイに嘘をつく』という副題をつけたが、さてこれで本作のテーマがわかる？

<『フィクサー』越えは？>

『ジェイソン・ボーン』シリーズ3部作の脚本家として有名なトニー・ギルロイの監督初作品『フィクサー』（07年）は、作品賞を含むアカデミー賞7部門にノミネートされた傑作で、「ここにまた、法科大学院生必見の名作が！」と私が評論したもの（『シネマルーム19』238頁参照）。『デュプリシティ』も日本人の並みの英語力ではわからないが、『フィクサー』もわかったようなわからないような単語。これは「黒幕」のような意味だが、アメリカの法曹界では「もみ消し屋」の隠語として使われているというのがミソだった。大手法律事務所と大企業の癒着を暴く「フィクサー」の姿を描いた『フィクサー』でも、かなりえげつない騙し合い風景がポイントだったが、「騙し合い」のレベルでは、当然プロのスパイを主人公とした本作の方が上。しかし、作品の出来としての、本作の『フィクサー』越えは？

<これぞ、アメリカ型競争社会のスパイ戦争>

米国発の金融危機の広がりにより、米国自慢の「金融工学」はすっかり色あせてしまったが、民主主義政治と自由主義経済を基盤とする米国型競争社会は今なお健在？本作におけるディック・ガーシック（ポール・ジアマッティ）をCEOとするエクイクロム社と、ハワード・タリー（トム・ウィルキンソン）をCEOとするパケット&ランドル社の企業競争を見ているとそんな実感が。

両社ともトイレタリー用品の製造販売を営む大企業だが、業界最大手の老舗メーカーがパケット&ランドル社で、後発の新興勢力がエクイクロム社。企業が生き残り発展していくためには、絶え間ないイノベーションと新商品開発が不可欠。しかし、それは相対的な関係だから、互いにライバル企業がどんな新商品の開発を狙っているのかは最大の関心事。そこで必要になるのが産業スパイというわけだ。

日本でも、かつて梶山季之原作の『黒の試走車』という、自動車メーカーの熾烈な新車開発競争の中で暗躍する産業スパイを描いた有名な小説があったが、本作に描かれたアメリカにおける大企業間の産業スパイの暗躍ぶりとそれを比べると、隔世の感がある。まさに、これぞアメリカ型競争社会における産業スパイ戦争だ。

<プロのスパイ同士の恋愛模様は？>

本作が面白いのは、本作のテイストを単なる産業スパイ同士の血で血を洗う（？）抗争劇とせず、美男美女の産業スパイの微妙な恋愛模様を大きなテーマとしたこと。つまり、騙し騙されることを職業上くり返してきた2人にとっては、互いの愛さえもどこまで信じていいのかわからなくなってしまっているわけだ。

最近『インサイド・マン』（06年）（『シネマルーム11』65頁参照）、『エリザベス：ゴールデン・エイジ』（07年）（『シネマルーム18』174頁参照）、『シューテム・アップ』（07年）（『シネマルーム19』208頁参照）、『ザ・バンカー 墮ちた巨像-』（09年）などやけに出演作が多いクライヴ・オーウェンが、『クローサー』（04年）で共演したジュリア・ロバーツに対していかなるモーションを？他方、『チャーリー・ウィルソンズ・ウォー』（07年）でトム・ハンクス、フィリップ・シーモア・ホフマンらと共演したものの、最近主演作のなかったジュリア・ロバーツは、クライヴ・オーウェンに対していかなるモーションを？

MI6、CIAのスパイとして互いの実力を認め合っていた2人は、スパイ活動中にもドバイ、ローマ、ロンドンなどで東の間の逢瀬を楽しんでいたようだ。スクリーン上ではフラッシュバック映像としてそんな微笑ましい姿（？）が再三登場するが、プロのスパイ同士の恋愛は大変なよう。だって、恋愛の基本は相手を信じることだが、スパイの職業病は相手を信じないことなのだから。さあ、互いにライバル企業に帰属するそんな2人の産業スパイの恋は成就するの？そりゃ、普通に考えれば難しいはずだが・・・。

<毛生え薬を発明すればノーベル賞？>

「ネタばれ厳禁」とわかった上で私が問題提起したいのは、もし「毛生え薬」を発明すれば、それはきっとノーベル賞に値するのでは？ということ。つまり、「革命的な発明」とパケット&ランドル社がうそぶいている新製品とは、ハゲのあなた、劣等感いっぱいあなたを一瞬にして自信満々にさせる毛生え薬・・・？

新製品開発のためには、企業収益のかなりの部分を研究開発費に割かなければならないのは当然。トヨタだってソニーだってそうしてきたわけだ。したがって、その研究成果だけをライバル社の産業スパイに盗まれたのでは、鷲に油揚げをさらわれるようなもので、そんなことを容認したCEOはたちまちクビにされるに決まっている。そんな厳しい現実下、パケット&ランドル社CEOのハワードとエクイクロム社CEOのディックは毛生え薬の開発をめぐるいかに産業スパイの活用を？

しかし私が思うに、そんな毛生え薬の発明は21世紀中は難しく、22世紀に持ちこまれるほど難しいのでは？

<CEOあれこれ>

オバマ大統領は国民の税金によって公的支援を受けた米国保険最大手アメリカン・インターナショナル・グループ（AIG）がCEOや幹部たちに巨額の賞与を支払っていたことに激怒したが、本作におけるエクイクロム社のディックやパケット&ランドル社のハワードの動きぶりを見ていると、莫大な報酬をもらうのは当然と思える面もある。

老舗企業パケット&ランドル社のCEOハワードは悠然と構えているが、かつてのホリエモンこと堀江貴文を彷彿させる（？）エクイクロム社のCEOディックの頑張りはずい。パケット&ランドル社が自信満々で近いうちに発表する新製品の何たるかがわからないまま、自社の株主総会を9日後に控えたディックのイライラぶりは頂点に。しかし、クレアやレイの働きによってパケット&ランドル社の新製品の調査のコピーを入手したことによって自信満々となり、晴れの株主総会に臨んだディックがみせるパフォーマンスは日本で見慣れた株主総会の風景とは異質のもの。

民営化された日本郵政株式会社の初代社長に就任した西川善文氏が、鳩山邦夫総務大臣のいじめ（？）にあって悪戦苦闘している姿を見るとCEOも大変だが、本作におけるディックとハワードという2人のCEO像から、「CEOあれこれ」をじっくりと考察してみたい。

<最後の勝者は？最後の敗者は？>

男と女はどちらがウソつき？その答えは、女に決まっている。だって、女は嘘を嘘と思わないでつくことができる動物だから・・・？本作におけるレイとクレアの仕事上及び恋愛上の騙しぶりをみていると、どう見てもクレアの方が上。つまりクレアの複雑さに比べれば、レイは子供のように単純に思えるわけだ。すると、やっぱりスパイ同士の騙しあい合戦はクレアの勝ち？

プロゴルファーは60歳を超えてもシニア戦などで闘うことができるが、格闘技はもちろんプロ野球やサッカー選手も選手生命は短く、せいぜい10～20年といったところ。それに比べて産業スパイのスパイ生命はどれくらい？伊賀や甲賀の「忍びの者」は、役割を変えながら死ぬまで仕事に従事する者がいたはずだが、忍者だって現役バリバリで動ける期間は短いはず。それと同じように、レイとクレアの産業スパイ生命もかなり短いはずだ。

そこで2人とも現実的に必要なことは、引退後の生活設計。とりわけ女性としての花の命が短いクレアにとっては、そんな必要性が強いはず。そんな暗黙の了解が、2人を恋人としてより親密にさせたのでは？さあ、2人が描く引退後の人生設計とは？そしてそのために狙った大仕事とは？その結果明らかになる、本作における最後の勝者は？最後の敗者は？もっとも、何をもって勝ち負けというのかの基準が難しいから、その評価はじっくり腰を据えてやる必要があるが・・・。

2009（平成21）年4月11日記